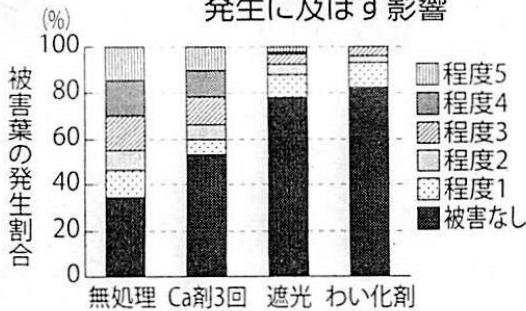


わい化剤とカルシウム剤処理が葉先枯れ症状の発生に及ぼす影響



県農林技術開発センターで品種改良された夏秋輪菊「白涼」

(注)被害葉の発生割合は各被害程度葉数/調査葉数×100で算出。被害程度は程度1(軽度)〜程度5(重度)で評価

輪菊「白涼」の商品性向上 消灯時わい化剤処理 葉先枯れ防ぎ高品質

は、夏場でも奇形花の発生が少ない品種です。
しかし、盆向け用の出荷作型では、消灯が梅雨時期に当たることから葉先枯れ症状が発生

い化剤(ダミノジット80%)を3000倍で散布すると、その後の葉先枯れ症状の発生が大幅に軽減されました。

さらに、わい化剤により節間が詰まって葉数が増加するため、ポリウムアップ効果も期待できます。

一方、カルシウム剤の葉面散布は、若干の軽減効果しか得られず、遮光処理(消灯から2週間)は、わい化剤と同等に葉先枯れ症状を軽減できますが、茎や上位葉が小さくなり商品性が低下しました。

以上のことから、葉先枯れ症状の軽減には消灯時のわい化剤散布が最も効果的であり、さらに品質向上に対する効果も見られました。

今後は、わい化剤により葉先枯れが軽減される作用機構について明らかにしていく予定です。

(県農林技術開発センター農産園芸研究部門 久村麻子研究員)

「白涼」を5月9日に植え付けし、6月20日の消灯日に、わい化剤

し、商品性の低下が見られませんでした。そこで、葉先枯れ症状を効果的に軽減する技術について検討を行いました。